

# 毒使いビッチと童貞勇者

えびまよクラン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『勇者のセックスはつまらない。』

ヒーラーが性奴隸として扱われる世界で、毒使いの元ヒーラーは今日も勇者に抱かれる。

そんな日々に嫌気がさしながらもナアナアで過ごす主人公のもとに、全身かさぶただらけの少年が訪れる。

曰く、「毒の魔法を教えて下さい」。

長編のオープニングふうの短編ファンタジー。

毒使いビツチと童貞勇者

目

次

## 毒使いビツチと童貞勇者

勇者のセックスはつまらない。

こつちのことなんておかまいなしで、自分が気持ちよくなるために腰を振る豚野郎ばかり。「気持ちいいだろ?」じやねーんだよ。「大洪水だぜ?」だつて?『言うほど濡れてねえつづうの。それに、めちゃくちゃに搔き回したら多少は濡れるモンだつて。身体反応しんたいはんのう』として。それはあくまでも反応であつて、感情なんかじや断じてない。こつちの気持ちを全然無視して身体ばっかりいじられたつて、そんなものの、気持ち悪いわボケ。感情と身体が一緒に導かれて初めて気持ちいいんだつづうの。アタシの言う『気持ちいい……』が『さっぱり気持ちよくねえんだよカス』だつてことに気付いてほしいけれど、豚野郎どもはやつぱり気付かない。

昨晩の奴らもそうちだつた。

毎度のことながら、そんなことを考えながらベランダで煙草を吹かすアタシも、なかなかにどうしようもない女なのかもしれない。なんて、ちょっととナーバスになりつつ、沼地を行く銀の鎧たちを見送るアタシ。柵に身体を預けて、痛めつけられた腰をさする。

デブの勇者には二種類いる。寝転がってご奉仕待ちのポンコツか、のしかかるのが大好きなマザコンか。

昨晩の勇者は後者だつた。

ファック。

お仲間の魔法使いと戦士も同じ性癖のデブで、そりやもう最悪だつた。

ファックファック。

昨日の雨でぬかるんだ道を、ずんぐりした銀色がえつちらおつちら進む。紫のローブ姿の魔法使いと双剣を装備した軽装の戦士も、みんな揃つてどんくさい足運びだ。転べ、なんて思うけど、そんな間抜けな真似は仕出かさないあたり、本当に勇者どもは生意氣。足取りはぐずぐずなのに、鎧と同じく煌めく銀のランスは真っ直ぐに天を指し、日差しを反射して眩しい。

勇者の行く先——町の方角から風が吹いてきて、ほんのりと湿った腐臭が鼻を撫でる。沼地の空気も、夜の臭いよりは何倍もマシだ。自然是偉大。

装飾もなにもない素焼きの灰皿に三本目の煙草を押し付ける頃、マザコン三色団子は見えなくなつた。

室内に戻り、机の引き出しから唐草模様の小箱を取り出す。

「……あと二個じゃん」

小箱の中にはピンクの錠剤がふたつ、心許なく転がつている。

ファック。そういえば残り少ないから仕入れなきや、と何日も前からぼんやり考えてたつけ。延ばし延ばしにしてしまう理由もちゃんと分かつてゐる。

深呼吸をひとつして、錠剤をひとつ口に放り込む。続いて机の上の火酒を呷<sup>あお</sup>つてからベッドにダイブ。仰向けになつて、いつもの通り手を組み合わせる。

陽光の下の小川のせせらぎ。

魚が跳ねる。

着水と同時に、アタシは魚の目で水中を見ている。  
水草のうねり。

川底の石は滑らかさ。

見上げると、さざ波立つ水面が絶えず日光を歪ませてゐる。

仲間の魚が、誘うように視界にちらつく。

今アタシとは無関係の空想を頭に浮かべ、没入しようとする。薬による悪夢のような痛みから逃れる方法のうち、アタシに出来るのはなんとか目をそらすことくらい。それでもイメージは、現実の痛みとともに歪んでいく。

自然是偉大で、だから自然に逆行する行為には代償が伴う——なんて小賢しいこともアタシは考える。これでも昔は秀才だったんだ。今では落ちぶれたモンだけど。

ああ、それにしても痛い。お腹の中心から四肢のほうへと、ぎざぎざの鋸びた剃刀がゆつくりゆつくり泳いでいくみたいな感じ。痛い。

痛い痛い痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い痛つ、ふぐう、痛い、痛い痛い痛い。

魚の目。

水中。

痛い。

エメラルドブルーの日差し。

痛つ。

真つ赤な鱗。

剃刀。

血。

町に出たのは夕方になつてからだつた。

今朝の痛みは、いつも増してひどかつた。たぶん、デブ勇者にプレスされたせい。ホント、最低。

そんなわけで、アタシは石畳を歩いている。

画一的な三角屋根の家々、鉄製の吊り看板、酒場の呼び子の声。

「いらっしゃい！ 火酒置いてるよ！ いらっしゃいいらっしゃい！」

頭に響く大声。骨に染みて、腰にも響く。だからアタシは反射的に足を速めて通り過ぎたけれど、火酒は買っておきたい。残り少なくなつていた気がするから。

でも今は後回し。さつさと薬を手に入れる必要がある。

目指すは町の中心に建つ大袈裟な教会——否、娼館だ。

◆

「（ご）きげんよう、マリアさん。少し瘦せましたか？ しつかり食べて健康に生活しなければいけませんよ。貴女は昔から身体が弱かつたんですから、よくよく自分を大事にすることです。それにしても、マリアさんの顔を見ると嬉しくなりますね。しげかよ繁く通つてくれませんから、ほんの少しだけ寂しい気がします。貴女と同級の聖徒にも顔を合わせていつてはいかが？ 皆さん、きっと喜びますよ」

教会の扉をくぐるや否や、早口で捲し立てるシスターを前に、アタ

シはいつものように閉口している。うんざりしている。帰りたい、と思つてゐる。

アタシが笑顔を信用できなくなつたのはこの初老のオバサンのせいだけど、もはや憎む気もなくて、とつとと薬を頂戴、つて顔でため息をひとつ。

「言わなくとも分かつてますわ。お薬が切れそうなのね」

察しの良さは必ずしも美德ではないけど、今の場合はとつてもナイスだ。といつても、いつものことだけど。

薬を取りに礼拝堂を出していくシスターから目をそらして、聖像を眺める。ひだの多いローブをまとつた女が、鎧姿の男に抱かれて『いやいや』と顔をそらしながらも満更でもなさそうな顔を浮かべているゴミみたいな像だ。いつ見ても壊したくなる。

礼拝堂の隣には、三角屋根の石造りの建物がある。聖徒の私室や、教室、食堂、お仕置き部屋、そして『聖堂』が備えられたご立派な施設だ。アタシが十二歳まで過ごした場所で、よく覚えてる。

かつてのアタシは『聖堂』のことを、神聖なお祈りの場所だと思っていた。礼拝堂よりもグレードの高い特別な部屋だと。事実は違う。勇者のプレイルーム。

性堂。

ホント、しようもない。

「随分お待たせしちゃいましたね」

あ、シスターが戻つてきた。手には黒っぽい瓶。中には白の錠剤がたつぱり。

アタシが木箱を渡すと、シスターはわざわざひとつひとつ丁寧に錠剤を揃んでは、ゆっくりと箱に並べ始めた。これもいつもの通りの仕草。

「今日は聖徒のひとりが誕生日なんですよ。朝からはしやいで、とっても可愛らしい……。あの年代は世界全部が自分を祝福しているよう位に感じるものです。だから私のような年寄りは、期待通りに振舞わなければなりません」

あの年代つてどの年代よ——と思つたけど口には出さない。

ところでアタシは誕生日が嫌いだ。アタシの誕生日のことを、シスターは覚えていないのだろう。

十二歳の朝、アタシは勇者のパーティに迎えられた。聖徒——ヒーラーは魔族の討伐に欠かせない存在らしい。もちろん、別の意味でも欠かせない。

別の意味？

性奴隸つてこと。

世界は役割でできている。そして役割とやらは覆せないこともある。望むと望まざるとにかかわらず、特定の役割に押し込められてしまう人間がいるわけ。

アタシみたいに。

靴屋が靴を作るよう、戦士は戦士としての役割が、魔法使いには魔法使いとしての役割がある。まあ、勇者と一緒に旅をして魔族にぐちやぐちやにされる程度の役割だけど。

魔族は勇者にしか倒せない。

理屈はずつと昔にシスターから教わった氣がするけど、とっくに忘れてしまった。どうでもいいし。

なんにせよ、勇者にしか魔族とかいう化け物は殺せない。

そんな特別な存在には特別な権利が備わっている。

お店に入ればどんな品物はタダ。お酒も甘味も、武器も防具も下着も髪飾りも、全部タダ。商売人は特別なサインを貰つて、それを王都に送れば代金が戻つてくる。そんな仕組み。

今朝のデブの鎧がピカピカだったのは、どこかの誰かに磨かせたつてわけ。

ヒーラーはその名の通り、勇者を癒やす。回復魔法の専門家。で、勇者の夜のペットもある。最低なことに。

まあ、当然やられるだけじゃない。勇者ほどではないけれど、ヒーラーもそれなりの補填が王都からされている。

勇者と一発やれば、身体のどこかに紋章が浮かぶ。一日だけ。それを教会に見せれば、いくばくかのお金が貰える。そういう意味では娼婦的で、教会が娼館であることは疑いようのない事実に思えるけど、

やっぱりヒーラーは奴隸だと思う。拒否権がないんだもの。

そうそう、十二歳のことだ。アタシはひと晩たつぷり娼館で過ごした勇者に、朝一番で呼び出された。厳密には『この教会で一番優秀なヒーラーを出せ』と言われたシスターがアタシを呼んだだけだけど。

勇者の冒険はイージーなものじやない。

セツクスパートナーとしてピカイチでも、治癒能力や補助魔法に優れていなければ魔族との戦いで生き残れないってこと。

それに、町に行けばどこにも教会はあるわけで、夜のお供は都度都度求めればいいって考え方もある。アタシをパーティに入れた勇者もそういう奴——と、シスターは思つてたらしい。

事実は全然違う。

旅に出たその日の晩、勇者はアタシをレイプした。

残念ながら十二歳の子供に聖徒の実態を教えるほどシスターは進歩的な人間ではなくて、十六歳になつてはじめて性教育を色々と仕込むのが彼女のやり方だつた。

つまりアタシはなんにも知らない無垢な処女だつたし、わけも分からず泣いて、喚いて、辛くて辛くて、死にたいほど悔しくて、それが勇者にとつて新鮮だつたのか、随分と手酷くやられた。毎晩。

こうして振り返つてみると、人生はまるで悪いジョークみたいだ。

「人生は、そう悪いものではありません」

アタシの手を握るように木箱を返すシスターに、ハツとして記憶の旅から還る。

「いつか薬を飲まなくともいいと思えるときが——」

そんな時は永遠に来ない。アタシは勇者の子供なんて死んでも産みたくはないのだ。十二歳のときからずっと、その考えは変わらない。たとえ薬が激痛を伴うとしてもだ。

さて、薬は手に入つたし、もう教会に用はない。  
さよなら、シスター。またいつか。アンタが生きてれば。

◆  
去り際にシスターがくれた銀貨数枚は、すでに半分ほど火酒と煙草に消えてしまった。酒も煙草もまとめて購入できるのだから、この町

の酒場は優秀。

マスターも鬱陶しい干渉はしてこないし。酔っ払いに絡まれたらちゃんと助け舟を出してくれるあたり、ちゃんとしてる。

「災難だつたな、マリアさん」

「いいよ、別に。いつものことだし」

小太りのマスターと苦笑を交わして、アタシは火酒を呷る。お酒は良い。嫌なことがマイルドになる。

さつきまでアタシをからかっていた男は、今頃悪態をつきながら町をぶらついていることだろう。多くの男にとっちゃ、ヒーラーはツツコミどころ満載の玩具だ。色んな意味で。

『一発やらせろ』なんてのは挨拶代わりだし、どこにいてもなにをしても『ヒューウ』なんて浮ついた口笛が聴こえてくる。

でも実際に手を出そうとする奴はない。

特にアタシに対しては。

「聖徒は普段外出しないからね……君は氣の毒だ。いつも矢面やおもてに立たされる」

マスターは本当に氣の毒そうに眉を八の字にする。見慣れた顔だ。酒場に出入りし始めて日が浅い頃は、彼のそんな態度も下心の裏返しじやないかといぶか訝つたものだけれど、そうじやなかつた。アンタなら別に抱かれたつてかまわないよ、なんて本心から言つてみたら、見事に振られたし。それも、アタシがヒーラーで、すなわち勇者のお古だからってわけじやなくて、自分には奥さんがいるから、らしい。

「アタシみたいに、一回勇者のパーティに入つて無事に生き延びてるビツチなんて少ないからねー」

グラスを傾けると、琥珀色の液体が滑らかに波打つた。

「それだけマリアさんが逞たくましいということさ」

「なに言つてんのさ。アタシは貧弱だよ。今朝だつて、テブの勇者に夜通しファックされて、もう、腰がガタガタ」

「はは……あんまり大きな声では言わないように」

開けつ広げな猥談は酒場とはいえよろしくないことは知つてる。でも、そんなことは些末だ。本質はそこじやない。

勇者は多くの場合、犯罪が許されている。盗みはもちろん、殺しだつてケース次第で無罪放免。村や町は王都の技術や物資の提供で成り立っているわけで、王都は徹底的に勇者の味方だ。

勇者についての愚痴がうつかり本人の耳に入ろうものなら、どんな目に遭わされるか分かったもんじやない。

まあ、アタシはせいぜい道端でファックされるくらいだろうけど。それなら経験済みだし、セツクスした証も肌に浮き出るから、教会でお金も貰える。

それについても、マスターの困り顔を見るのは楽しい。日々の娯楽と言つてもいいくらい、アタシは彼の八の字眉にハマつて。今日も素敵じやん。

「そういうえば、『銀槍の勇者』以外にも勇者が町に来てるらしい」  
彼は声をひそめて言う。

「へー。またデブだつたら嫌だな。あと、尖つた性癖の奴も勘弁」「はは……マリアさんにお声がかかるとは限らないじやないか」

「教会のババアはアタシを紹介するよ。平気で。セツクスはアタシの役割で、聖徒らは純粹にヒーラーとして提供する魂胆だろうから。銀色のデブだつて、今朝はアタシを置いて教会に行つちやつたしね。今頃優秀な癒やし手と一緒に魔族討伐でしょ」

勇者のなかには魔族を避けるチキンもいる。甘い汁だけ吸いたい卑怯者。まあ、魔族にとつて勇者はご馳走だから、逃げ回つてもいつか見つかるわけだけど。

なんにせよ銀色デブは、珍しくチキンじやなかつた。昨日の夜、随分と意氣込んでたつけ。

『俺は俺の役目をまつとうする。生きて帰れないかもしれないが……もし命があつたら、また君に会いに行くよ』

会いに行く、つて。抱きに来るだけでしょに。まつたく。

「シスターのことを、あまり悪く言つちやいけないよ。君の親代わりだろう?』と、マスターはため息混じりに言う。

「親に唾を吐く子もいるつてこと」

「罰当たりだな」

「罰なんて当たらないよ。神様は目の潰れたインポ野郎だから」

マスターは『やれやれ』とでも言いたげに首を横に振る。と思つたら、実際に口に出す。

「やれやれ」

「お行儀の悪い口で、ごめんね」

「いいさ。……ところで、もうひとりの勇者——『不浄の勇者』のことなんだが」

「股間をギンギンにして町を彷徨つてるつて？」

「……オホン。どうやら、人探しをしてるらしいよ」

「セツクスパートナーの間違いじゃなくて？」

「さあ、それは分からない。なんでも、毒の魔法使いを求めてるらしい」

「……なんでまた毒の魔法使い？　こつそり殺したい相手でもいるつてわけ？」

軽口を叩きながらも、アタシは早速うんざりしていた。

結局、勇者はどいつもこいつもアタシのところに来る運命みたいに思えてくる。



アタシにとつて毒の魔法は、神様の皮肉なプレゼントだ。

勇者のパーティ——否、性奴隸として旅をしていたアタシは、割と大きめの街に寄つた際に、薬屋から毒瓶をせしめて路地裏で一気に飲み干した。

サヨナラ世界、つてな感じで。

あの頃のアタシは酷く傷付いていたし、今とは比べ物にならないくらいセンチメンタルだつたのだ。

毒瓶を飲み干したアタシは、死ぬ代わりに毒の魔法を体得した。まるで神様が『おお、死んでしまうとはもつたいない。これをあげよう。もう少し頑張んなさい』なんて訳知り顔でほざいてるみたいだつた。生き残つたアタシは、代わりに勇者を殺そうと思つた。毎晩毎晩えげつない抱き方をされるのは嫌だつたし、なにより、それに慣れつつある自分を想うと気分は地獄の底まで墮ちていつてしまふ。

で、アタシは勇者の食い物に毒をたっぷり仕込んだけど、奴はケロリと平らげた。その晩、犯されながら何度も毒の魔法をかけたのだけど、奴は死なかつた。

眞面目に勉強してれば踏まえていて当然の前提をアタシは知らなかつたのだ。

勇者はいかなる毒も受け付けない。そういうものなんだそうだ。無知なアタシにそんな常識を教えてくれたのは、当の勇者だつた。で、アタシは次の町でお払い箱にされたわけ。そりや当然だつて思う。自分を殺そうとするような相手と一緒にいるなんて、普通に考えてありえない。

勇者は代わりのセツクスパートナーを見繕つて、アタシにサヨナラファックをキメて、路上に放り出しやがつた。裸で。

故郷の町までなんとか帰らざるを得なかつたのは、勇者の広めた醜聞しゅうぶんのせいだ。まあ、毒殺しようとしたのは事実なのだけれど、それでも、十二歳の少女をあらゆる土地の教会が締め出すように取り計らつたその手腕は實に見事だと思う。どうかその能力をマトモなことに活かして貰いたかった。

ズタボロのアタシに対して、この町のシスターは最大限よくしてくれた、のだろう。聖徒として再び受け入れることはできなかつたようだけれど、生活の保証は約束してくれた。避妊薬の提供も。

今日まで、その約束はキツチリ守られている。でも一応教会のヒーラー扱いにはなつているから、勇者のお供はやらされる。

持ちつ持たれつってことだ。はつきりと口には出さないけど、システムにはそんな打算があつたのだろう。

そんなこんなで二十歳になる今の今まで、アタシは故郷で暮らしている。ちつとも使わないからか、それとも教会から締め出しを食らつたからなのか、神の奇跡たる治癒魔法は随分と弱まつてしまつた。

反面、毒魔法はなぜか強力になつていくんだから笑える。



「勇者が二人も来るなんてねえ」  
「こわいこわい」

「魔族に町が壊されたらたまつたもんじやないよ」

「たっぷり物を買って、さつさとどつかに消えてればねえ」

「そこそと陰口を叩く主婦の横を通り抜けると、三秒もしないうちに「おい！ 今なんの話をしてやがった!!」とオツサンの怒号が飛んだ。

素晴らしき自浄作用。万歳。どうかそのドロドロのシステムの泥土に沈んでくたばれ、と昔のアタシなら思つたことだろう。舌打ちのひとつでもしたかも。今はそんなのナシ。当たり前の光景にいちいち反応してたら精神が擦り切れるだけだもの。

万が一にも勇者が陰口を耳にしようものなら、町に二重の損害が出来る。

ひとつは、ヤケになつた勇者の暴走。腹が立つたからという理由で殺戮劇を繰り広げられたら困るってわけ。

でも、重要なのはもうひとつのはう。

魔族になつた勇者が、復讐しに来るかもしれない。

どうも勇者の血と魔族の血は相性がいいらしい。それも、かなり、とかいうレベルじやなく。

魔族は死に際に氣化する。それを吸い込んだ勇者は、ほとんどの場合、魔族になつてしまふ。一部の忍耐強い、精神力のある奴だけが勇者のままでいられる。

で、魔族になつても記憶も感情も残つてゐるわけで、人間時代にされた腹立たしい物事はキッチリ小さなオツムに詰まつてゐる。そういうえば町のババアがうぜえこと言つてやがつたな、よし、景気よく首をはねてやろう。スカツとしたいから、ついでに町もぶつ壊しちゃおう。てへつ、ついつい羽目を外して焼け野原にしちやつたぜ。——なんて、大袈裟でブラックなコメデイが展開されるのは勘弁してほしいつてこと。

とはいゝ、さつきの主婦もそうだけれど、基本的に町の人は平和ボケしてゐる感じがある。そりや、勇者に無理矢理パーティに加入させられることもなければ、当然魔族と戦うこともない。

魔族の側でも、基本的に一般人は襲わない。というかたまに町に来

たりする。んで、普通に買い物したりする。代金は払わないけど。でも長居されたら困るから、積極的に勇者の居場所をリーケすることだつてザラだ。魔族にとつて勇者はご馳走で、胃袋に收めれば大概満足して帰つていく。

勇者の居所を吐いても大したデメリットはないし、むしろ、頑なに隠して暴れられても困るのだ。

——とまあ、そんなあれこれをぼんやり考えていると、ドン、とぶつかられた。

「痛つ」

……と反射的に言つたのはアタシじゃない。アタシは直立不動。相手は無様に尻もちをついて、後生大事に抱えていたのだろう、紙袋の中身を路上にぶちまけた。

ころころころ、と林檎が灰色の路上を鮮やかに彩る。わあ綺麗、なんて少し思つちゃつた。

アタシにぶつかった相手は、男……というか少年だつた。目が少し隠れるくらいの、しつとりした黒髪。乞食でももつとマシなモン着てるんじゃないかと思つちゃうくらいボロボロのシャツとズボン。

見たことのない顔。旅人か、あるいは——。

アタシは林檎を拾いながら、それとなく彼を観察した。

「ごめんね、大丈夫?」

「おかげまいかく」

生意気な子だ。けど勇者より百倍マシ。で、コイツは間違いなく勇者じやない。勇者つてのは、いつだつて小綺麗にしてるモンだ。腹立たしいくらいに。

それと、コイツはなんの武器も持つてない。

オッケー。それなら少しくらい優しくしてあげよう。

「ほら、手を貸してあげる」

立たせてあげようと手首を掴むと——。

「触るな!!」

ええ……それ、あんまりじやない?

あまりにもあんまりじやない?

お姉さんはビツチだし、そりやあ世間一般の道理から考えれば穢れのひとつやふたつどころじやなくて百個くらい抱えているけれど、でもそれは道理が間違つてゐるわけで、というかそもそもアタシの生活や内面をこのガキが知つてるわけもなければ察してもいないだろうに、なんでこんな仕打ちを受けなきやいけないんだとは思うけど、それら全部を口に出すほどアタシは子供ではない。

だから、マスターを参考に困り顔を作つてしゃがみ込み、小首を傾げ氣味に「ごめんね、ボク。お姉さん悪いことしちやつた?」と優しく優しく声をかけてやつた。

効果があつたのかどうかは知らないけど、ガキはおろおろと目を泳がせ、サササッと林檎を紙袋に詰めた。

そしてひと言。

「ごめんなさい」

プラス、ぺこり。

アタシは呆気に取られて、少年がこつちの手から林檎を奪い去るのさえ、あまり意識していなかつた。

少年の態度が急変したからぼうつとしちやつたわけじやない。彼の手指、ボロボロの服の隙間から見える肌という肌——顔以外の部分が、ほんと、薄気味悪いくらいにかさぶただけだつたのだ。

少年はいつの間にやら駆け足で去つてしまつて、取り残されたアタシは今さらのように身震いした。その痛々しい肌になつた経緯を逆算して同情するよりも、嫌なものを見てしまつた、という感覚が先に居座つてしまつたのだ。

忘れよう、そうしよう。

神様が作つたシステムのなかで、比較的気の利いたものが『時間』だ。時間は嫌な記憶を、実感の届かない彼方に吹き飛ばしてくれる。さよならバイバイ最低の記憶の数々。

かさぶたと一緒に、少年のことも忘れよう。どうせひと晩寝れば、この瞬間の記憶は些細なものに変わつてくれる。少なくとも、リアルな寒気を感じることはなくなるだろう。



世界が皮肉なのはいつものことで、嫌な予感は大抵当たるし、世に言うフラグは多くの場合、回収される。

『今日は平和な一日でありますように！』と珍しく朝一番でお祈りなんてした日には、最低の一日が約束されるようなものだ。

要するに、夕食時にわざわざノックしてきた相手が例のガキであることは、はじめから決まっていたようなコトってわけ。

そして、その最低の来訪者が昼間のお詫びにやつてきたわけじやないつてコトも、やっぱりあらかじめ決まっていたような気がする。さすがに開口一番『僕に毒の魔法を教えてください』とほざいたのは驚いたけど。



「——で、なんで毒の魔法を使いたいの」

今日の夕飯はシチューだ。昨日の残り物だけれど、たっぷり作ったので明日までシチュー三昧。すなわち、突然来訪したガキに恵んでやるくらいの量はあるわけだ。

なのに、ガキはテーブルにちょこんと座つて、なんのアピールか知らないけど膝でキチンと拳を握つて、背筋を伸ばしたままシチューには手も伸ばさない。湯気が虚しく、シャープで幼稚な顎のあたりを漂っている。

ガキはシチューに目もくれない。

食べるよう手で促したけれども、彼はほんの一瞬目を落としただけで、すぐにアタシを見る。呆れてしまうくらい真っ直ぐに。ま、いいや。

アタシはアタシの腹ごしらえをするだけ。  
シチューをひと掬い、口へと運ぶ。

「自分に毒をかけたいんです」

……なに言つてんの、この子。口を開けたまま手が止まっちゃったじゃん。

とりあえず、中途半端に宙で止まつた匙を口まで持つていく。

昨日も思つたけど、少し濃過ぎるかも。温める前に水を足せばよかつた。ほんのり後悔。

「……自分に毒をかけたいんです」

「聴こえてるよ」

もうひと口。

「毒の魔法使いがいると聞いて、ここまで来たんです。……貴女がそ  
うなんですよね？」

『貴女』だなんて、一丁前な呼び方するじやないの。大人ぶりたい年頃  
なのかも知れないけど、ただただ生意気。アタシがもうちょっと素直  
な性格だったら『あら可愛い』だなんて思うのかも知れないけど、残  
念ながら町でも指折りのひねくれ者だ。それに、見かけがどうであろ  
うと、目の前の存在を可愛いだなんて思えない。絶対に。

「アンタが、町に来てたもうひとりの勇者なのね？」

確かに、マスターは『不浄の勇者』とか呼んでいたつけ。勇者なんて  
例外なく不浄でしょ。間違いなく。

「そう。『不浄の勇者』って呼ばれてます」

「ふうん」

「名前はイブです」

「聞いてない」

顔立ち通り、中性的な名前。名は体を表さないというのがアタシの  
信条だけれど、こいつの場合には当てはまらないみたいだ。

それにもしても。

「アンタは勇者で、しかも自分に毒を注ぎたいって？」

「はい」

呆れた無知だ。

勇者に毒は効かない。そういう訓練を受けているのだから。つま  
りアタシの前にいるガキは、一騙り（・・）ってわけ。

「たまにいるのよね、アンタみたいに勇者を名乗る偽物が」  
「偽物じやありません」

「証拠は？ 勇者なら身体のどこかに刻印があるでしょ？」

「……」

イブと名乗ったガキは袖をまくつて見せた。……かさぶただらけ

で、刻印なんて見えやしない。というか、食事中にそんな肌を見せるのはどうかと思う。促したアタシも悪いかもしれないけど。

「いつもそうやつて町の人を騙してたわけ？」

「今日はたまたま刻印が隠れてるだけです」

「なら、かさぶたを剥がせばいいじゃない」

「それは駄目です。痛いのはちょっと……」

しょんぼりと俯いたつて容赦なんてしてあげない。そもそも彼の要求 자체、下心が見え透いてる。魔法の修行にかこつけて勇者特権だのなんだの言つてアタシに筆下ろしでもさせたいのだろう。まったく、近頃のガキは節操がない。というか、こんな子供の嘘を真に受けるマスターたちにうんざり。

「シチュー。冷めないうちに食べれば？」

「食べたら毒の魔法を教えてくれますか？」

「……馬鹿にしてんの？」

シチューはアタシの善意だつてのに、この子は……。いつたいどんな生き方をしたらそんなふうに強引になれるのやら。そしてとびきり無知なのだから救えない。

「知らないみたいだから教えてあげる。いい？　まず、勇者に毒は効かない。で、シチューはアタシの好意。いらぬなら下げるけど」

「僕は特別に、毒が効くんです」

「ふうん。なら今すぐ試してあげよっか？」

「今は駄目です」

ほら。なんだかんだ証明なんてなにひとつできないのだ。  
どんどん逃げ道を塞いでやろう。動かぬ真実で。

「毒の魔法を会得するには、毒を飲んで生き延びる必要があるのよ。それだけじゃなくて、補助魔法の素質がなきや駄目。知つてるだろうけど、アタシは元々ヒーラーなのよ。今じやそつち方面はさっぱりだけど、一応、補助魔法を使うだけの素質があつたわけ。仮にアンタが勇者なら、魔法の素質はないでしょ」

戦士は体力と筋力、魔法使いは魔力、ヒーラーは治癒力。それぞれに領分がある。勇者の場合は、スキルとかいう特別な力が備わってる

だけ。補助魔法の素質はない……たぶん。

イブは悄然と目を落とした——かと思えば、匙を持ち上げてシューをふうふうと冷ましている。

そうそう、さつさと食べてさつさと帰ればいい。今日の晩御飯くらいは恵んであげるけど、それ以上は絶対にナシだ。お金があれば考へてあげるけど、でも、やつぱり勇者を騙るような奴はナシ。これに懲りて二度と勇者を名乗るなんて暴挙やめたほうがいい。

それらしく諭そうと頭で言葉を捏ねくり回しているうちに、イブの吐息がやんだ。シチューを皿に戻し、顔を上げる。

「なら、貴女が僕のパーティに入つてください」

「は？」

「僕に毒の魔法が使えないなら、貴女が僕を毒にすれば——」

「はいはい、もうこの話はおしまい。早いところシチュー食べてママのところに戻りな」

あ、ちょっと嫌なこと言つちやつたかも。

「ママには会つたことないです。パパは死にました」

「……あつそ。じゃあそのかさぶたは？ 虐待じゃないの？」

てつくり、虐待とばかり思つていた。だから『ママ』つて言葉を出したときに内心、しまつた、と反省したのだ。

「これは魔族と戦つてできた傷です」

「へー。ほらシチュー食べな。冷めるよ」

これ以上『不浄の勇者』の設定に付き合うのも馬鹿馬鹿しい。そもそも『不浄の勇者』つて自分でつけた二つ名なのかな。だとしたら失笑モノのおめでたい青春病だ。将来ベッドのなかで昔の自分を思い出して悶絶することだろう。

というか、かさぶただつて、本当は泥を巧妙に貼り付けただけかもしれない。とにかくこいつが病的な凝り性なのは分かつた。

イブはほんのり口を尖らせた無表情で、またぞろシチューをふうふうしあじめる。相当な猫舌らしく、ちつとも口に運ぼうとしない。

それどころか、またも匙を皿にどぼん。で、アタシをじつと見つめる。

「どうすれば信じてくれますか？」

「信じる信じる。協力しないだけで」

「どうすれば協力してくれるんですか？」

「ああ、もう、面倒くさい。子供ってこんなにウザいものだっけ。アタシ自身がそれなりに酷い子供時代を送ったものだから、なるべく優しく接してはいるんだけど、いい加減うんざりもしてくる。」

「アンタが魔族に狙われたら信じて——」

◆  
本日二度目のノックが部屋に響いた。

戸口に立つ男を見るや否や、アタシは高濃度のびっくりとうんざりを味わつた。

「約束通り、戻つたぞ」

昨晩夜通しアタシをファック——というよりプレス——したデブ勇者が、そこにいた。

まあ、厳密にはもう勇者じやなかつたんだけど。

銀の鎧は名残すらなくて、上半身は素つ裸。下半身は鎧付きのズボン——グリーヴつて言うんだつけ?——だけが残っている。兜もなし。ただ、ご自慢の槍はちゃんと持つていた。

けど、それはどうでもいい。

すっかり紫色に染まつた肌と、真つ赤な瞳、そして額に突き出た一本角。

ああ、これは……困っちゃつたな。魔族を倒したんだ、本当に。で、氣化した敵を吸い込んで魔族になつちやつたつてことね……。

元勇者のデブは、ぼたぼたと涎を垂らして仁王立ちしている。

約束つてなんだつけ。あ、そうか。戻つたらアタシを抱くとかつていう——いやいや、さすがに魔族とやつたことはないし、アタシ、死んじやうんじや……?

「マリアあ。約束う」

瞳孔開いてるし。こわ。てかキモイ。人間のときもイケメンではなかつたし、むしろブサイクなほうだつたけど、人として最低限の清潔感はあつた。でも今はそういうのが全部取り払われて、欲望剥き出

しの化け物つて感じ。

肩をデブに掴まれ、アタシは情けないくらい、びくん、と震えてしまった。身体が動かない。動いてくれない。

だから思いきり身体が後ろに引かれたとき、勢いそのままに尻もちを突いてしまった。

痛みだと衝撃だと、そんなものはどうでもいい。例のガキがデブに突進して、二人とも戸外へ転がり出る映像が目の前に展開されていて、それに意識を奪われてしまった。

「テメエ!! 僕の邪魔をすんじゃねえよ!!」

「お前の相手は僕だ」

すっかり濃くなつた闇の先から、声が届く。

ハツとして起き上がり、アタシも戸外へと飛び出た。

なにやつてんの、あの子。馬鹿じやないの。勇者ごっこなんてしていられる状況じやないでしょ。室内のどこかに隠れて、こつそり機をみて逃げ出すべきでしょ。それか、テーブルの下でぶるぶる震えてるとか、あるいは初めて見た魔族にビビッて硬直してるとか、それが普通でしょ。

それなのにイブは、ぼやつとした闇のなかで、デブと距離を置いて対峙していた。

「勇敢なガキだな。いいぜ。テメエから爛りものにしてやる」

「や——」

アタシが、やめて、と叫ぼうとした瞬間には、もう手遅れだった。瞬時に距離を詰めたデブの拳がイブに直撃し、華奢な身体が冗談のように吹き飛んでいく。絶対死んだ、つてくらい容赦ない攻撃だった。闇の先で、小さな身体が地面を転がる音がして、それから、しん、と静寂が下りた。

「やり過ぎたな。まだ身体が慣れてねえ」なんて、デブは呟いて、こちらを向いた。「邪魔者は消えた。さあ、約束を果たしてもらおうか」

さよなら、イブ。可哀想な子供。アンタは盾突いちやいけない相手にまで、妄想の延長線上で突つ込んでいつてしまつた。世の中には逆らつちやいけない相手がいるし、抱いていい妄想の範囲も決まって

る。

役割をこなすのが生き残るコツなんだ。アタシはそれを<sup>わきま</sup>弁えてなかつたから、色々と苦しんだ挙句、死にそこなつた。イブ。アンタはきつちり死ねただから、案外幸運だつたのかもしれない。

「マリア」

アタシを見下ろす元勇者。現、魔族。その目には欲望しかない。欲望のはけ口にされるのは慣れてるし、それがアタシの役割だ。

「いいよ。相手したげる」

犯されてる途中でアタシは殺されるかもしない。運良く生き残るかもしない。

なんにせよ、アタシは求められるとおりにするだけ。これまでも、これからも。

「目を閉じろ」

瞼が降りて、なにも見えなくなる。

「……外でするの？」

「ああ、そうだ。景気よくやろう」

景気よくやろう、か。昨晩4Pしたときも同じこと言つてたつけ。そういえば、彼と一緒に旅立つた戦士と魔法使いは死んだのかな。まあ、生きてるわけないか。もしかすると、魔族になつた元勇者に殺されたのかも。

なんだつていいけど、早く済ましてほしい。アタシの生死は関係なく、こういうのはさつさと始めてさつさと終わらせるべきなのだ。でも、デブはいつまで経つてもアタシに触れもしなかつた。身じろぎした気配があるだけ。

「なんだ、テメエ。なんで生きてんだ」

ぱちり、とほんんど無意識に瞼を開く。

アタシに背を向けたデブの視線の先に、頭から血を流したイブがいた。ふらふらと、殴られたダメージを引きずつている様子で歩いてくる。

「お前の相手は、僕だ」

なに言つてんの、この子。というか、奇跡的に助かつたんなら早く逃げなつて。アンタの妄想がコイツに通用しないことくらい分かつたでしょ。

「ねえ、あんな子供無視しましょ」

デブの腕に触れる。ほんと祈るような気持ちで、でも、それを気取られないように必死に演技をする。

「マリア、テメエ……なんで教えなかつた」

デブは少年を凝視したまま、忌々しげに言つた。

「教えなかつたつて？」

「あのクソガキが勇者だつて、なんで俺に言わなかつた。……どうりで涎が止まらねえわけだ。この家に近付いたときから、ずっと『旨そくな臭い』がしてたからなあ」

え？

ぽかんとするアタシを無視して、デブがゆっくりとイブへ歩む。

イブはというと——。

「なにしてんの、あの子」

イブは大口を開け、そこに自分の手を突っ込んだ。ずるずると、腕のなかばまで口の中に呑み込まれていく。

デブは警戒したのか、足を止めた。

やがてイブは一気に腕を引き抜いた。ぬらぬらと汁の滴る手には、せいぜい刃渡り十センチ程度の小さな銀のナイフが握られていた。

曲芸にしては手が込み過ぎてるし、このタイミングでそんなことをするのも異常だ。つまりイブは、たつた今魔族が口にした通り、本当に勇者なんじやないか。

どくどくと、心臓の鼓動が激しくなっていく。

不意にイブが魔族へと飛びかかり——。

「くつ……」

デブは手にした銀の槍を、咄嗟に薙ぎ払つた。ナイフを振りかぶつたイブの腹部に直撃し、あえなく吹き飛んでいく。

地面に落下した彼は大きく肩で息をしながら、再びナイフをかまえて今度は突進した。

「串刺しになりやがれ！」

一瞬にして放たれた刺突は空振りに終わつた。デブが「あ？」と言つたときにはすでに、少年は懐まで潜り込んでいて――。いけ。そのままナイフで刺しちやえ、と思ったけど、そうはならなかつた。

デブは少年の腹に膝蹴りを入れると、そのまま顔を殴りつけ、地面に叩きつける。

そこからは一方的だつた。

殴る。

蹴る。

叩きつける。

魔族は槍を捨て、愉しくて愉しくてたまらないのか、耳障りな笑いを上げながら少年を痛めつけた。

「ハハハハハ!! なんだテメエ！ めちゃくちゃ弱えな!!」

もしかしたら、イブは魔族を討伐してくれるかもしれない。彼が本物の勇者だと察した瞬間、アタシはそんな期待を抱いてしまつた。だけど、残念だ。

イブは弱い。アタシの目から見ても、どうしようもないくらい弱い。

血まみれになり、肩で息をし、喘ぎながら、イブはナイフを振り回す。が、それが魔族に命中することはなかつた。

耐久力はそこそこあるようだけど、このままじや駄目だろう。殺されるだけだ。

「死ね！」

少年の鼻から、血が噴き出す。

「死ね!!」

腹を蹴りつけられ、吐血する。

「死ね!!」

地面に叩きつけられ、無様に転がり――デブの胸に十字の切り傷が生まれ、血が迸つた。

「え？」

「あ？」

アタシと魔族の声が、やや遅れて重なった。

ボコボコにされていたイブが、いつの間にやら反撃をしていたのだ。とんでもない速度でナイフが振るわれるのが一瞬だけ見えた。

魔族は激情したのか、殴打の速度を上げていく。

何発かに一回は回避するものの、基本的にイブはサンドバックにされている。

さつきの反撃は偶然……？

と思った瞬間、またデブの身体に傷が走り、血が噴き出した。

どうやら偶然じやなさそうだ。

それにも、なんだか酷い戦い。ボロボロになりながら、なんか反撃するだけ。血まみれで、泥だらけで、優雅さの欠片もない。こんな戦い方をする勇者の話なんて聞いたことがない。だいだい、パーティも組まず単独で魔族に向かっていく勇者なんて前代未聞……。

そういえば、イブはスキルを使つてるの？

勇者には必ず特別なスキルがあるわけで、それを駆使して優雅に戦うのが基本だけど。

段々と、敵の攻撃を回避する頻度と、反撃を食らわせる量が多くなっているように見えた。それでも半々程度で、結局イブはボコボコにされつつ戦つている。まるで子供の喧嘩みたいだけど、徐々に動きがよくなつてゐるような……。

戦闘の行方には少なからず興味があつたけど、なんだか少し眩暈がした。それは飛び散る血とかの問題じやなくて、アタシの精神的なものが影響している。

イブに勝つてほしい気持ちはある。でもそれと同じくらい強く、勝てないだろうなと諦めてる自分もいた。

イブも、そろそろ諦めればいいのに。必死になつて、血と泥だらけになつて、それでも立つなんて、見ているこつちとしても辛い。どうせ駄目なら、やっぱり諦めるのが一番賢い選択なんじやないの？

アタシはちゃんと分かつて。抗つたつて惨めに潰されるだけな

んだ。だから最初から全部受け入れてしまえば最悪にはならない。イブだつてわざわざ魔族に突っ込んでいかなければ、しんどい思いなんてしなかつたのに。勝ちの目があるのならそれでも頑張る価値はあるかもだけど。

アタシだつて勇者を殺そうと思わなければ——あるいは自殺なんて思い立たなければ——今こんな人生なんて送つていなかつた。

「マリア！ コイツを魔法で攻撃しろ!!」

意識を現実に戻すと、傷だらけになつた魔族がアタシを睨んでいた。表情に余裕はない。イブもボロボロだけど、いつの間にか魔族も同じような状態になつていた。

頑張つたんだな、イブ。すごいな。

でも、結局のところ報われないかもしれない。勝つたつて、魔族になつちやうかもしれないんだ。だから魔族からひたすら逃げ続ける勇者もいるし、むしろそつちのほうが多いかもしれないくらい。

アンタの前にいる『銀槍の勇者』は魔族に頑張つて立ち向かつて、勝つて、でも自分も魔族になつちやつたんだ。

それで、元の通りの性欲を満たすためだろうけど、約束した通りにアタシのもとまでやつてきた。なんだか少しだけ、いじらしくもある。

でも虚しいじやないの。アタシとセックスする前にアンタに邪魔されて……なんて報われないんだろう。

「マリアあ!!」

魔族が叫ぶ。使えるものは全部使つて、目の前の敵に勝ちたいんだろう。あるいは、勝利した上でアタシを抱きたいのかも。彼の目的がどこにあるのか分からない。

「アンタに協力したら、優しくしてくれる？」

「馬鹿なこと言つてんじやねえアバズレ!! さつさとクソ勇者を攻撃しろ!! でなきやテメエから殺すぞ!!」

そうだよね。それでいいと思う。勇者は傲慢で、それは魔族になつても変わらない。

今では、イブのほうが若干優勢に見えた。彼の動きはどんどん良く

なっている。けれども、傷もその分増えていた。結局のところどちらが勝つかは分からぬ状況。

指先に意識を集中する。毒々しい、穢れた魔力が集つていく感覚があつた。

アタシに使えるマトモな魔法は毒くらいだ。

「攻撃してください、僕に」

それで貴女が標的にされないのなら——なんて、イブは思つていな

いだろう。そんな殊勝な子じやない。

「デッドリー・ポイズン」

アタシの指先から放たれた紫の液体がイブに直撃した。すると、みるみる彼の顔が紫色に変わつっていく。

勇者に毒は効かないのが常識なわけで、つまり、イブは例外中の例外というわけだ。彼自身がそう言つたように。

「よくやつたマリアあ!! これで——」

これで魔族は負けるだろう。きっと。

イブはずつと、自分に毒をかける方法を求めていた。そこにどんな意味があるのか、もう大体の想像はついている。

イブは、傷が増えるごとに、地を転げて泥まみれになるごとに、あるいは血を流すごとに、動きが洗練されていつている。

痛み苦しみで強くなる。それが彼のスキルなんだろう。

やがてアタシの想像通りの決着が訪れた。

魔族の身体に無数の傷が刻まれ、しまいには首が吹き飛んだ。

さよなら、元『銀槍の勇者』。アタシはちよつぴり、アンタに同情してもいい。

アンタが今朝、アタシの髪を撫でて、ほんの少し哀れっぽい目をしたのを覚えてる。

……とまあ、そんなことを考えていたのもほんの一瞬だけだ。

「イブ！ さつさとそこから離れて！」

アタシの声が聴こえていいのかいののか、イブはぼんやりと空を見上げていた。

魔族は絶命と同時に氣化する。それを吸い込んだ勇者は——。

◆ イブの身体が紫の靄に包まれていく。

やがて靄が晴れ、アタシは脱力した。紫の肌をしたイブがそこにへたり込んで、荒い息をしていたから。魔族の肌は紫色だけれど、それ以外にも特徴がある。必ず頭に角があるのだ。

今のイブに、そのシンボルは存在しない。肌の紫はアタシの毒が原因だ。

「イブ……！」

彼の前まで駆け寄る。

イブは弱々しくアタシを見上げた。魔族に勝つて、しかも人間であり続けているというのに、満足そうな表情ひとつない。

たぶん、極端に感情表現が乏しいとか、そういうタイプなんだろう。おめでとうとか、よくやつたねとか、そんな台詞を吐く気にはならない。あんまり情をかけて調子に乗られても困る。こいつは勇者で、つまり、ヒーラーを性処理の道具としてしか見てないのだ。おかしな奴だとは思うけど、結局勇者だったのだから、色んな女の子を泣かせてきたに違いない。

「動かないで」

だから、勘違いだけはさせないように。これは毒使いとして、必要不可欠な治療だ。

アタシはイブの目を片手で塞いで、唇を重ねた。そして素早く舌を入れ、血の味のする彼の舌に絡ませる。

意識を集中させ、舌先に魔力を込めた。

解毒魔法がディープキスとか、まつたくふざけた話だけれど、ほかに方法がないのだから仕方ない。よし、このくらいで大丈夫。

彼の視界を塞いでいた手をどかし、同時に唇を離す。

唾液が糸を引いているのが見えた。

「これは解毒魔法で、必要なことなの。だから――」

彼の肌はすっかり元の白さを取り戻していて、けれど、頬は随分と

赤い。そしてどうしてかイブは顔をそらした。

「なに赤くなつてんのよ。勇者なんだから、こんなこと——」

「初めてで……」

「……は？」

「だ、だからつ、こういうのは——ちゅう、とか、初めてで……え。え？」

ちゅう、つて。なにそれ。

「童貞なの？」

イブは答えもせず、ただただ赤面して視線を泳がせている。なにそれ。なにそれなにそれ。

「あはっ」

「！ 笑わないでください！」

「あはは。いや、これは笑うでしょ。あはははは！」

こんな清々しい気分になつたのはいつぶりだろう。分かんないや。



「——で、せつかくだから筆下ろししてあげてもいいかなつて思つたんだけど、町の宿屋に泊まるつて言つて逃げられちゃつたわけ。顔真っ赤にして」

マスターはアタシの話を聞いてる間、ずっと苦笑していた。朝から猥談を聞かされる可哀想なマスター。今日も困り眉が素敵。「あまり勇者を困らせたらいけないよ」

「童貞勇者なんて笑い話にしかならないでしょ」

「だとしても」

マスターは火酒をカウンターに置いた。ふた瓶も。しかも未開封。「なにこれ。プレゼント？ やだなー、物で釣るなんて。マスターならタダで抱かせてあげるつて」

アタシの冗談に、彼は首を振る。「違うよ。餞別さ」「ふーん。じゃあ、もうバレてるんだ」

マスターは肩を竦めて、手元のグラスを拭く。

「君がいなくなると寂しくなるね」

「嬉しいこと言つてくれるじやん」

「シスターに挨拶はしたのかい？」

「してないよ。今頃教会で『不浄の童貞勇者』がパーティ加入の申請しているだろうし、いいかなって」

「お別れと感謝は、直接言つたほうがいい」

「そうね。相手によるけど」

「……やれやれ」

それ以上、マスターはなにも言わない。

ほどほどのお説教をしてくれる彼のことが、アタシは大好きだ。マスターと過ごす、この酒場のひとときを愛している。カラソコロンと、ドアベルが涼しげな音を運んだ。

「さよなら、マスター」

「さようなら、マリアさん。お元氣で」

「マスターもね」

酒場の入り口に陽光が射していて、少年ひとり分の影が年季の入った床に落ちていた。